

性癖沼にハマる話

輝く羊モドキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

性的嗜好って、千差万別。貴方も性癖について(暴力的に)語り合ってみませんか。

目次

性癖：ロリババア	1
性癖：ケモノ	4
性癖：モンスター娘	8
性癖：シヨタ	12
性癖：TS娘	15
戦え性癖沼レンジャー！	19

性癖：ロリババア

「私はランプの魔人（男）。お前の願いを何でも叶えてやろう」

「やったぜ」（短編特有の超速理解）

「さあ、願い事を言え！」

「好感度MAXのロリババアを嫁にしたい」

「お、おう……よしわかった。では明日にでもお前の願いは叶っているだろう」

「やったぜ」（短編特有の思考停止）

◆
「……くあく……ああ……あさかあ」

ランプの魔人を名乗る変人に出会った次の日の朝。俺は万年床から抜け出て顔を洗う。眠い目を擦りながら朝食のシリアルフレークの準備をしていると、襖から狐耳と尻尾を生やした見た目5歳くらいの金髪ロリが現れた。

「ふあく……うむ、おはよう主様。今日も良い天気じゃの」

「……おう」

「なんじゃ、その気の無い返事は。一日の始まりは挨拶からじゃぞ？
まったく、挨拶も出来んとは嘆かわしいのう。それに朝食がシリアル
フレークとは……日本男児なら米を食わんか米を」

「……おう」

「まあよい、わしも寝起きで腹が減った。少しわしにも食べさせろ」

そう言って狐耳金髪ロリは俺の隣に座り、「んあ」と口を開けた。

「……どうした、はよう食べさせい」

◆
「チェンジで」

「おい、何が気に食わないんだ。ちゃんと願い通りロリババアを用意してやっただろう」

「お前は何も分かっていない。何も理解っていない。何もかもがダメだ」

「はあ？何がダメだと言うんだ」

「いいか、まずロリババアキャラなのに狐耳とか安直すぎる。そのうえ金髪とかお前ナメてんの？外国人なの？設定アメリカンかよ。ロリババアキャラは腰に届く程に長く艶やかな黒髪以外ありえないから。さらに言えば身体が小さすぎる。何なのお前ペドなの？死ぬの？小学校高学年くらいの身長で、さらに年長者特有の面倒見の良さでダツラダラに甘えさせてくれるんだよ。それが何お前俺より遅く起きて、さらに朝食まで俺に用意させようとしてくるんだボケが。そもそも主様ってなんだよ奴隷プレイかテメエ。良いか？俺の理想のロリババアは黒髪ロングで身長は130cm前後、家事全般が得意だけど調理台に手が届かないから踏み台をてこてこ運んでる姿が萌える。膝枕をするのもさせるのも大好きでご飯を食べる時は常にあーんで食べさせてくれるほどにダダ甘、夜のプロレスごっここの時は「わ、わしの胸なぞ小さくてツマランだろう」的な身体のコンプレックスを仄かに感じさせる奥ゆかしさを備えてるんだよ！そんなロリババアにちゅっちゅしゅっ昼は甘えまくり、夜は甘えさせまくりな怠惰で淫靡な生活を送りたいんだよ分かったか無能！」

「は？ロリババアキャラなら狐耳狐尻尾は黄金比だろ常識なんだが？その上金髪或いは白髪なのはもはや鬼に金棒で性癖ぶっぱ一発KOなのは確定的に明らか。小学校高学年くらいの身長？育ちすぎだろそれもう“ロリ”ババアじゃねえだろボケ。年長者特有の面倒見の良さ？自分より長く生きてるのに生活能力皆無で、その上耳年魔なくせに経験が伴っていなから色々チョコロ甘で口達者な二面性が萌えるんだろうが。夜の性生活にしても「こういうのがスキなんじゃろ？」って言って様々な事を積極的に取り入れて攻める姿に“ロリ”のギャップが生きてくるんだろうが気はたしかか？そんなロリババア

にちゅっちゅしゅつつ昼は甘やかしまくり、夜はサキユバスもビツクリな淫靡でメリハリのある生活が至高だろうが分かってんのか童貞！」

「あ？」

「は？」

「よろしい、ならば戦争だ」

一時間後、そこにはロリババアでつながった熱い友情を讃えあう馬鹿共二人がいたそうなの。

性癖：ケモノ

「私はランプの魔人（男）。お前の願いを何でも叶えてやろう」

「やったぜ」（短編特有の超速理解）

「さあ、願い事を言え！」

「好感度MAXのケモノを嫁にしたい」

「お、おう……よしわかった。では明日にでもお前の願いは叶っているだろう」

「やったぜ」（短編特有の思考停止）



ワン！ワン！と元気の良い犬の鳴き声で起床する。

「おはようございますですわん！ご主人様朝です！朝です！」

「……誰？」

「酷いですわん!?毎日こうやって起こしているのに誰って……あんまりですわん！」

「……あー……えー……もしかして俺のペットの……」

「ポチですわん！」

俺の目の前には、俺のペットと同じ名前を名乗るモフモフの塊。紛うことなき犬が人の言葉を喋っていた。

「カッ！カッ！カッ！」



「おい」

「なんだよ」

「イヌやんけ」

「ケモノ嫁にしたいって言ったやろが」

「違うんだよ!!」

「何が違うんだよケモナー」

「お前は何も理解していない!!ズーフイリアとケモナーの違いを理解していない!!」

「同じ変態じゃん」

「違うんだよ……違うんだよ……」(血涙)

「分かった、分かったって……じゃあ別パターンでやるから」

「オナシヤス……」



ワン！ワン！と元氣の良い犬の鳴き声で起床する。

「おはようございますですわん！お兄様朝です！朝です！」

「……誰？」

「酷いですわん!?毎日こうやって起こしているのに誰って……あんまりですわん！」

「……あー……えー……もしかして俺の妹の……」

「凜乃ですわん！」

俺の目の前には、イヌミミカチューシャとイヌシツポ付きズボンをはいた妹が立っていた。

「カット！カアット!!!」



「おい」

「なんだよ今度は」

「妹で、しかも100%人間やんけ」

「禁断の愛って素敵やん」(魔人スマイル)

「わかる……ってチゲーよ。お前ケモナー舐めてんの？」

「何が不満なんだよ。ちゃんと動物要素入れてるだろ」

「コスプレの範囲内じゃねえか!?違うんだよ俺の求めているケモノって

のはさあー！」

「何？尻尾付属ズボンじゃなくてケツ穴に挿すタイプの良かった？」

「そこじゃねえよ！もっとうこう……（人間＋動物）÷2くらいのさあ……！」

「イヌミミカチューシャダメか？」

「人間＋玩具になってるから駄目だ！」

「分からん……！」



ニャー、ニャー、と静かに主張するタイプの猫の鳴き声で起床する。

「ご主人さんおはようだニャ」

「……」

「な、何ニャその目は。今日は村長さんが呼んでるから朝から発情するのはダメニャ……」

「……」

「で、でもどうしてもって言うのなら一回くらいなら……いいニャ」

「流石にア○ルーじゃ勃たねえよ……!!」



「違うんだよ！ア○ルー可愛いけど勃たねえよ！」

「なんでアナ○ーはダメなんだよ」

「最悪な誤字してるんじゃないやねえよ！CAPCONに謝れ！」

「だめだ、お前の言う事がちつともわからん。もっと具体的にどんなのが良いのか言ってみろ」

「ズー○ピアのジュディ・○ツプス……」

「なんでそれイケてア○ルーダメなのが分かんねえよ」

それから約一時間男はケモノについて熱弁を振るったが、結局魔人には理解出来なかった。

「何!? 狐耳尻尾はケモノではないのか!？」

「ちがうんだよ!」

性癖：モンスター娘

「私はランプの魔人（男）。お前の願いを何でも叶えてやろう」

「やったぜ」（短編特有の超速理解）

「さあ、願い事を言え！」

「好感度MAXのモンスター娘を嫁にしたい」

「お、おう……よしわかった。では明日にでもお前の願いは叶っているだろう」

「やったぜ」（短編特有の思考停止）



「起きなさい……起きなさい……私の可愛い勇者……」

「モンスターキター！」

キターツと跳び起きれば、目の前には金の瞳で黒白目のパツチリとした青肌の美女。ちよつと視線を上にならせば、まるで磨かれた黒曜石の様にピカピカと光る角が頭に沿うように生えていた。

「うふふ……さあ、朝食の準備は出来ているわ。早く着替えて下に降りてらっしゃい……」

優しい気な笑みを浮かべながら美女（特盛ツ！）は扉を開け、寝室から出ていった。

うん。

「モンスターじゃないじゃんっ!!」



「ちやうやろ」

「ちがわへんやろ」

「いや、ちやうやろ」

「ちがわへんって！」
「ちやうやんけ!!」
「どこがちやうか言うてみい！」
「悪魔っ娘とモン娘はちやうやるがいッッッ!!」
「ちがわへんやる！同じモンスターやないけ!!」
「ちやうねん!!犬と猫並にちやうねんて!!」
「犬も猫もペットやるがい!!」
「ちやうねんって!!!」



「おきろー！勇者朝だよー!!」
「今度こそモン娘キターー！」
キタアンツ！と跳び起きれば、目の前には手のひらサイズの女の子が。ちっちゃい、いや、頭身的には大人と変わらないんだが、何分ちっちゃい。
「さあさあ時間が惜しいわ勇者！今日中に私達全員と子作りしてもらうんだからー！」
「下で元気の出る（意味深）料理がたっぷりあるからね！」
「勇者様にはがんばってもらわないと……」
「じゃ私達先行ってるからねー！」
複数人（匹?）の小さな女の子達が寝室から出ていき、ぽつんと一人残された俺。何だハーレムだったか。

「じゃねえよ！無理無理無理無理力タツムリだよ!!」



「ちやうねん」
「ちやわへんやんけ」
「ちやうねんて」

「なにがちやうねんて」

「俺、女の子が可愛そうなのはちよつと勃たない」

「なんやて?」

「いやいやいや、妖精は良いよ? 良いけどさ? 小さすぎじゃん。子作りとか言ってるじゃん。つまり俺のドリルがあの小さな体を貫くドリルになる訳でしょ? 怖いわ」

「黙れピーナッツ」

「誰のドコがナッツサイズだよ! ちげーよ! 俺は腹ボゴオみたいなの無理なんだよ! やめれ! フェアリーたちの身体が裂けるだろ!」

「大丈夫やで、アレらは全員オ○ホ妖精だからフリーサイズや。精○が食料やから」

「だから見た目の問題で無理だつってんだよ理解れ!」

「何だコイツクツソワガママやな」

「何かお前他にないのかよ」

「他? 他ねえ……じゃあラミアと丸呑みプレイ」

「明確に死が予測できるのは却下」

「……じゃあアラクネーの毒打ち搾りプレイ」

「変わってねえだろうが」

「……じゃあアルラウネと共生受粉強制プレイ」

「えー俺が主導権握れないのはなあー」

「お前モンスター娘に何求めてんだよいい加減にしろ!!」

「ひえっ」

「良いか!? モン娘つてのはなあ普通の人間には絶対できない様な強引なプレイが萌え要素なんだよ!! いわば究極のサディズム! 敗北ルートからの逆レがお約束なんだよ! 人外特有のファンタジックビースト(意味深)で股間をもげるほど抜かれるのがお約束なんだよ! だつっののに何? 主導権握れないのはなあ?! 殺すぞ」

「シユイマシエン」

「許さない。お前は死ぬまで異種族に丸呑まれレビューアーズしてもらいます。延々とあひつていつてね!」

その後男の姿を見た者は居ない。

性癖：シヨタ

「私はランプの魔人（女）。お前の願いを何でも叶えてあげましょう」
「やったぜ」（短編特有の超速理解）

「さあ、願い事を言え！」

「好感度MAXのシヨタを嫁にしたい」

「ん？ん？何言ってるんのお前」

「うるせえいいからさっさとシヨタらせろ！」

「あっはい」（短編特有の思考停止）



「はあ……はあ……兄ちゃ……んう……ボク……もう……」

俺の目の前には、俺が普段使っている枕に顔をうずめながら夢中になつて腰をカクカクと振っている、可愛い義理の弟が居る。

息を荒くし、ビクツ、ビクツ、と跳ねる尻肉を見ていると思わず驚き、掴みしてしまいたくなる。

俺の寝室で一人遊びにふける義理の弟は、部屋の主が戻ってきている事に未だ気が付いていない。

部屋の主とはいえ、ここは本来なら見てみぬふりをするべきなのだろう。だが、俺の中の悪戯心は常識を破壊する。

わしつとズボン越しの尻肉（柔らかい！）を引っ掴み、ベットから引きずり落とす。

「あっ!!? ああっ!!? あへえアっ!!? あに、兄ちゃ、な、えあ?!!」

まるで何が起きたのかと言わんばかりに混乱し慌てる弟。強く引っ張り過ぎた所為か、ズボンは半ばその役目を放棄して中身を半分程晒していた。

その中身とは白のブリーフであり、ブリーフ内から収容違反を起こしている腕ほどの太さと長さを兼ね揃えたポケットモンスター（意味深）が

「It's All FICTION!!」



「……ッ！」（声にならない叫び）

「……ッ！ッ！」（余りにももどかしい嘆き）

「ッ！……ッ！ッ！」（言葉が首もとまで出てきているのに声に出ない手振り）

「チ○コがデカイシヨタは認めませんツツツ!!!」

「わかる」

「誰だ今の」

「お前さ、お前さあ!!!コレだから女って奴はよおほんによお!!!」

「何が不満なの」

「チン○だよチ・○・コ!!何アレ!あれ何!?!OHジャパニーズウタマローの域超えてるよ!ウタマロというか馬タローだよもはや!可愛げなんてモンないやん!」

「何言ってるんの、可愛い顔してイチモツがデカイ。ナイスギヤツプじゃないの」

「ナイスどころか無いツスだわ。萎えツスだわ。意味分かんないんですけど。何アレ、股から首くらいにまで伸びてなかった?」

「セルフ顔射どころかセルフ亀頭舐めも出来そう」

「ヴオエ!(嘔吐)つつーかお前シヨタのちんちんデカくて何の徳があるんだ!」

「は?お前ホモならデカチ○ポに掘られてあんあんよがつてなさいよ」

「馬鹿じゃねえの(真顔)いいか?シヨタは、ホモじゃない」

「はああー(クソデカため息)お前なにシヨタ道舐めてんの?舐めんのは玉だけにしときなさい。シヨタはお前のチ○ポケースじゃないのよっ。」

「お前は分かっている。『可愛いのに男、男なのに可愛い。でも同じ男だからこそその友情からメスの快樂オスの劣情に堕ちていく様』が股間にキくんだろうがお前は何も理解出来ていない」

「だから何？結局自分がマウント取りたいからシヨタ道に逃げてるだけでしょ？お前それでも玉ついてんの？シヨタチン巨ケースに変えるわよ？」

「馬鹿お前シヨタちんちんぺろすんのとシヨタ(偽)チ○コに掘られるのじゃ意味合いが変わってくんだよ！」

「わかる」

「だからお前は誰なんだ」

「いいか!?俺はなあ、可愛いシヨタが生意気なクソガキな時から何だかんだあれやこれやして大好きラブラブ状態になって、なんだかんだで男同士なのに好きって感情はおかしんじゃないかって葛藤して、そこからもうどうでもいいやあ♥と言わんばかりのメス堕ちが見たいんだよ！理解れ！」

「お前それは……！」

「……ッ！」(声にならない叫び)

「……ッ！ッ！」(余りにももどかしい嘆き)

「ッ！……ッ！ッ！ッ！」(言葉が首もとまで出てきているのに声に出ない手振り)

『シヨタ』じゃなくて『男の娘』でやりなさいよッッッ!!」

「それな」

なんだかんだあつて魔人(女)と結婚した。

性癖：TS娘

「私はランプの魔人（男）。お前の願いを何でも叶えてやろう」

「やったぜ」（短編特有の超速理解）

「さあ、願い事を言え！」

「好感度MAXのTS娘を嫁にしたい」

「お、おう……よしわかった。では明日にでもお前の願いは叶っているだろう」

「やったぜ」（短編特有の思考停止）



チュン チュチュン チュン

「……」

「……おはよ……♥」

「……」

「き、昨日は凄かったね……腰が砕けたかと思った……♥」

「……」

「や、やあーアレだわ。女ってヤバイわ、ほんと。頭がフットーしそうだよおとかネタじゃなかったわ、うん……♥」

「……」

「つていうか、おまえちよつと底なし過ぎない？オレが男の時でも10は無理だったよ……うあ、昨日のが垂れて……♥」

「……」

「あーやば……」

「ね、もっかいシない？♥」

「なんか違うんだよオオオオオオオオオオオオ!!!」



「はい反省会」

「願い通りじゃん良かったな」

「違うんだよ、違うんだよ!!なんか……なんか違うんだよ!!」

「何が違うんだか言ってみろ」

「なんか……なんか………?」

「何が違うんだ……?」

「はーい解散」

「待ってええええ!違うのおおお!!違わないけど違うのおおお!!」

「だから何が違うんだ言ってみろカス」

「テメエランプの魔人だか何だか知らねえが調子に乗るなよクズ」

「おうわかった。じゃあな」

「ごめえええええええええええええええええん!!俺が悪かったああああアアアアアアア!!」

「うるせえ話進めろ!!」

「はい」

「まず順番に整理していこうか。まずお前が求めたのはなんだ?」

「俺の事スキスキ光線放つくらい好きなTS娘です」

「で、結果は?」

「俺の事スキスキ光線放ってるめちやシコボディなTS娘でした……」

「何が不満なんだよ」

「分かってる……元男であるシチュが全然生かされてないこの状況がアレって事は分かってる……!」

「じゃーどーすればいいんですかねー」

「分かんないよおおおお!!」

「私は通りすがりのTS娘大好きおじさん」

「貴方はTS大好きおじさん！」

急に新キャラ出てこないで？

「私はおじさんだから自分の事はよく分かっている。そう、本当はビールを呑んでスルメ食ってタバコ吸ってという生活を改めなければ近いうちに死ぬって分かってる。でも止められないんだよなあ」

「話逸れてるっすよおじさん！」

「そう、TS娘の話だったね。良いかね、TSの醍醐味と言えば即ち……」

「即ち……」

「あ、俺話纏まるまでランプに戻っていいっすか？」

「あっはいどうぞ」

「それは精神が肉体に引つ張られていくまでの葛藤ツツ!!」

「お、おお！なんかすごくそれっぽい！」

「例えば君の親友が突然TSしたとする。最初は見た目が凄いい美少女なのに男装して、しかも親友だと名乗るからさあどうしたものか！となるだろう！」

「おお、実に王道な始まり方ですね！」

「だが見た目は美少女だが仕草や言動は男のまま、だからふと気が付けば君はその親友と普段通りに接し続けることが出来ていた！」

「おおおー」

「その親友も君と接している時は心も男のままだった……だが、とある切っ掛けからその親友は女装……否、女らしい恰好を強いられる！」

「おおおおおく!!」

「始めは髪型を変えたり、アクセサリを変えたり、上着を変えたり、そして下着を変えたり。見た目の変化は中身の変化だ。『これが……俺……?』から『こっちの方が似合うな』とか『これカワイイ』とかになってゆく。そして気が付く、自分にとって一番近い異性の存在を……だが！」

「……だが？」

「見た目まで女の子らしく変わっても、君はその子とは親友のまま

だった！親友はデートのつもりでも、君はただ男友達の一人と遊びに行く意識の差ギャップ！軽いボディタッチや関節キス等にドキドキしても、君は全然気にもしない！」

「も、もどかしいっ!!」

「そう……そこで親友は最終手段を取った」

「ゴクリ」

「『これでもボクはまだ男かな?』そう言っつて服を脱ぎ捨「キヤー／＼／いやーもーヤベエっすねー流石TSおじさん分かってるう!!!」私がTSしてる訳ではないのだがね!？」

「ああ……道は……拓けた……!」

「ふ、どうやらもうおじさんの出番は終了のようだな」

「ありがとうございますましたTS大好きおじさん!」シコシコ

「ふ、良いのだ。若くして道に迷う子羊を導くのも年長者の務めよ……」

「年長者特有の面倒見の良さ……! 貴方はまさか……!」シコシコシコ

「だあもー!ランプをシコシコ磨くんじゃねえよ!!」

「え、だっつて話纏まったし……」

「呼べよ普通に!」

「ふふふ、これも年長者の務め……くらえTSしてらぶらぶちゅっちゅしたくなるビーム!!」

「ぐわああ!!」

「ま、魔人かっこおとこかっこてじ (男) ー!!」

「な、なにが……!?!」髪フアツサアアア

「ところで青年よ」

「なんでしようTS大好きおじさん」

スレンダーTS娘って、良いよな。良い……。

なんやかんやでスレンダーTS魔人娘と結婚した。

戦え性癖沼レンジャー！

ある日、世界はサキュバスクイーンによって支配された。

そして世界中の男達はアヘアへ種無しきんたまとなりサキュバスクイーンの配下の女達の奴隷として生きる事を強いられていた。

しかし、男全てが心まで支配されてはいなかった！

サキュバスクイーンを倒すために五人の男が立ち上がる！

可愛いの権化！オネ、オバ特効持ちのスタミナお化け！シヨタレッツド！

面倒見の良さナンバー1！恋愛においても分からないことはない超頭脳派！メガネグリーン！

THE・イケメン！甘いマスクと甘い言葉で落とすレディキラー！イケメンブルー！

オラオラ系のスター！距離感なんて関係ねえ！アニキイエロー！

超パワー！超タフネス！超テクニック！超デカイ！種付けオジサン！

全ては男女の純愛を守るため、戦え性癖沼レンジャー！未来は君らに懸かっている！



世界の何処かにあるレジスタンス基地内部

「ただいま戻りました！」

「おう、戻ったぞ」

「お帰りなさいレッド、イエロー、オジサン。例の件はどうでした……って、まあ聞くまでも無さそうですね」

「やっぱオジサンつえーわ。ぶっちゃけ俺等なんも役に立ってなかったし」

「僕は後方でデバフかけてただけでしたし……」

「役に立ってない、なんてことはないですよレッド、イエロー。貴方達のヘイト管理のお陰でオジサンはサキュバスクイーンの幹部、マーマ

イドラゴンに種付けセツ〇ス出来た……と言っています」

「はいはい、話はその辺にして食事にするぞー。俺達は身体が資本なんだ、残さず食べ食べ」

「はいグリーンお母さん」

「誰がグリーンお母さんだ。今日の食事はアンコウとスツポン合わせ鍋だ」

「うわクツソうまそう」

「イエロー、口が悪いですよ」

「わあとても美味しそうですわー！」

「ボク骨多いの嫌いなんだよなあ……」

シヨタレット！遠距離特化の支援魔法使い！近づこうにも持ち前のスタミナで逃げる！逃げる！逃げる！特技のウルウル目は数多もママを作り、例え襲われても（意味深）逆転墮ちするまで濃いのを放出するぞー！（超意味深）

「レット、好き嫌いは駄目だぞ。ちゃんと食べよ……骨は取ってやるから」

メガネグリーン！全距離攻撃型の魔法使い兼盗賊！器用な指先で宝箱の開錠から相手の弱点（意味深）の集中攻撃（意味深）まで何でもこなす！戦いは始まる前に終わらせる（超意味深）タイプだ！

「ふふふ、今日もまた全員無事に過ぎせた事に感謝します」

イケメンブルー！回復役にして調教師！優しい顔で相手の警戒心を下げ、傷ついた身体を癒して警戒心をさらに下げ、紙以下の心の防御に容赦なく支配の魔法（意味深）を叩き込む！

「つーか最近肉が足りねえぞ肉！あと揚げ物！」

アニキイエロー！ガンガン相手に詰め寄る盾役！デカイ身体相対のパワーで相手に迫り、無理矢理自身に向かせて力で墮とす（意味深）！身体もデカけりや槍（意味深）もデカイパワータイプ！

「……」ムシヤムシヤ

種付けオジサン！レットを上回るスタミナ！グリーンを超えるテク！ブルーを超える回復力！イエローを超えるパワー&サイズ！そして誰よりも強い種付け力！何連戦だって出来るしどんな相手でも

持ち前のグングニルの槍で屈アヘ顔ダブルピース服させる！

『やあやあ食事中シツレイ！性癖沼レンジャーの皆に急報ダヨ。南の国でクイーンサキュバスの配下、ハーピースライムが大暴れしているヨウダ。このままだと南の国の男達は皆カツサカサのシツオシオにナルネエ！』

彼、いや彼女？の名はハカセ（貫通済み）！性癖沼レンジャーを陰でサポートしているサキュバスクイーンの元部下！非常に中性的で男か女かは見た目だけでは絶対にわからない！彼の本当の性別は彼自身と種付けオジサンしか知らない……！

「ハーピースライム……か。確か彼女は……」
「相当な面食い……！」

「なら私と種付けオジサンの出番の様ですね」

「ああ。頼んだぜブルー、種付けオジサン」

「ああ全く、偶にはゆっくり休ませてくれての……」

「何言ってるんですかグリーン。一番大変な種付けオジサンが弱音を言わないのに、貴方が言ってるんです」

「とは言っても色んな国に繋げるワープポータルを作るのは俺の仕事なんだけども？」

「一度繋いだら暫く休めるじゃねえか何言ってるんだお前」

「そうだよ、種付けオジサンなんて寝る時以外ずっとたたせてるんだよー！」

『オーウグリーン、これはちよつと種付けオジサンの“気合い”注入する必要があるそうダネエ？』

「あ、いやまってスママセン冗談でしたン”オ”オ”♥」

世界中から純愛を守る為、性癖沼レンジャーはひと時の休みすらないのだ！

さあ戦え性癖沼レンジャー！サキュバスクイーンから純愛を取り戻すために！

「オ”ツ”♥”オ”ウ”ウ”ン”♥」パンパン